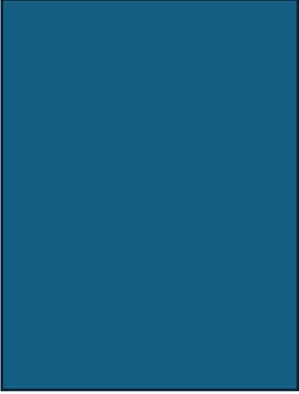


こんなものを読んできた（33）

やまだのぼる「アルマーク」1～4（KADOKAWA MF ブックス）

校長 鈴木 健



主人公の少年アルマークは、戦乱の絶えない「北」で、傭兵隊の副長を務めるレイズの息子として生まれました。アルマークは父のようになりたくて剣の腕を磨き、9歳の頃には戦場でも名前を知られるほどの戦士となっていました。しかしレイズは、頭がよく心の優しいアルマークには傭兵以外の生き方をしてほしいと考え、アルマークを平和な「南」の魔法学院へと送り出します。1年以上かけて大陸を「北」から「南」へと縦断したアルマークは、2年遅れで魔法学院に編入し、そこで食いしん坊のモーゲンや、大貴族の娘ウエンディと知り合います…。

この作品は、魔法や魔物のいる世界を舞台にしたファンタジーで、よくあると言えばよくあるお話です。ついでに言うと主人公が魔法学院に入学して、ちょっと頼りない食いしん坊の少年や、優しくて勇気のある少女と仲良くなって活躍するという、まるで「Oリー・Oッター」のようなお話でもあります。ただ、それでも私はこの作品はいい、と思います。

どこがいいのか？ というと、まず地に足がついた作品世界をしっかりと構築しているところです。

最近のラノベでは、主人公がゲームの世界に転生、前世の知識やチート能力を使って大活躍、というのが、ほとんど何の説明もなく当たり前のよう描かれます。時代小説で江戸時代や戦国時代という枠組みがデフォルトで使われるのと同様に、そういうジャンルなんだから、と思えばいいのかもしれませんが、ちょっと乱暴すぎだと思います。

「アルマーク」では、主人公は転生者でもなんでもなく、剣技も魔法も自分の努力で身につけていきます。魔法があると言っても、一発で敵の大軍を消滅させるような馬鹿げたものではありません。ですから物語もアルマークがいわゆる無双をするのではなく、学園でのアルマークの生活や成長をきちんと描いていきます。

またアルマークやクラスメートの心情を丁寧に描写しているのもいいところです。アルマークの育った「北」は、自分の力を示せない者は侮られるシビアな世界です。アルマークは子供ながら何人もの敵を倒した戦士で「北」の流儀が身につけていますが、ウエンディの弱者を思いやり守ることこそ貴族の義務とする生き方を知り、心を惹かれます。ウエンディも強くてまっすぐなアルマークのことが気になっていますが、一方で命のやり取りを平気で言い、裏切りさえも日常茶飯事の「北の傭兵」を激しく憎んでいます。そのためアルマークは自分の正体をウエンディに明かすことができません。

この二人の関係はどうなるのでしょうか。また、アルマークたちの学園生活の背後で世界の存亡にかかわる大きな動きも始まっているようです。今、小説は4巻まで（コミカライズは6巻まで）出ていますが、続巻が待ち遠しいところです。